

BP ガス施設事件の結末

Halper and Associates

(2013年2月1日付)

イナメナス近郊のティガントウリネにあるガス施設で発生した人質事件には、以下のようにいまだに解明されない疑問がある。イナメナスはアルジェリア東部イリジ県の県都イリジのすぐ北にある国境の町であり、このガス施設はBP社、スタトイル社、及びソナトラック社が共同運営している。

この攻撃は、サハラ砂漠の石油・ガス施設に対する一連の攻撃の端緒を開くものとなるのか。北アフリカの欧米人に対する暗黙の脅しについてはどうか。これは最近のベンガジにおける欧米人などに対する威嚇によって現実のものとなっている。そしてフランスのマリへの軍事介入を考慮に入れると、ヨーロッパ、日本、米国に対する脅威の深刻さはどの程度になるのだろうか。(イギリスのデビット・キャメロン首相が今回の誘拐事件後に懸念を示した)。実際に、マリへの介入とイナメナスの事件には関連があるのか。サヘルとサハラにおける新アルカイダ系組織による攻撃の一部なのか。

アルジェリアの広大な国土のなかでも最も警備体制が整っているとされていた地域でこのような攻撃が起きたのはなぜか。つまり、これは革命後に混乱が起き、長年にわたり危険なりビア奥地から人と武器が非合法に輸送される主要経路となっているリビアとの国境地帯で起きたことである。国際社会、特に英国と日本から、

情報の欠如と救出作戦に関して非難が高まっているにもかかわらず、アルジェリア政府が示した反応の真意は何か。人質7人の殺害と軍による最後の攻撃によって、暴力的にこの事件の幕が下ろされたとき、少なくとも2人の犯人が、恐らくは最大で5人の人質と共に逃亡できたのはなぜか。最後に、800人以上もの従業員を抱え、企業警備員、地元警官隊、及びアルジェリア軍に警護されたターゲットに対して、35～40人の重武装したテロリスト集団が求めたものは何か。

戦略的背景

上記の疑問に対して答えを探すときに忘れてはならないのは、サハラとサヘルの現状が全く異なる2つの紛争の結果に基づくという事実である。1つ目の紛争(2つのうちの理解しやすい方)は、伝統的なサハラ砂漠の遊牧民トゥアレグ族の現状に関連している。トゥアレグ族の活動範囲はリビア西部からアルジェリア南部を越えてニジェール北部及びマリへと広がっている。トゥアレグ族は少数民族であり国境を越えて拡散しているために、周辺諸国からは疑惑の目で見られ疎外されてきた。1960年代のサヘル大干ばつによって、トゥアレグ族はさらに窮迫し、その後多くがサヘルの辺境地域に定住した。

トゥアレグ族は定住国で疎外されていることに激しい怒りの声を上げ始めた。この怒りは、

1960年代のマリの独立直後の動乱のさなかに爆発したが、マリ軍の残虐行為によって鎮圧された。その後1990年代にマリとその隣国ニジェールで起きた2つの暴動は、それぞれ1992年のフランスと1995年のアルジェリアの介入によって終結した。さらに2007年にニジェールで別の暴動が起きた。この時は、リビアのカダフィ大佐がアルジェリア政府に干渉しないよう釘を刺した後、アルジェリアによる調停で終結した。この時期までにアルジェリアは、自国をサハラ砂漠におけるトゥアレグ族の擁護者と見なすようになっていた。

とはいえ、リビアにはトゥアレグ族について独自の優先順位があり、国内の安全保障を目的として、Twargisをリビア軍に雇い入れ始めた。Twargis 2,000~5,000人が主にマリから「イスラム軍」と呼ばれる傭兵部隊とその関連部隊に入隊したと言われている。ただし、その多くはリビア内戦の初期に離脱して、リビア国民評議会の蜂起を支援した。カダフィ政権が崩壊したときに多数のTwargisがマリに帰国したが、これは内戦後Twargisに対する不信感がリビア国内に蔓延したためである。Twargisは大量の武器を持ち帰り、マリ国内で積年の不満を解消しようとしていた。2011年10月アザワド解放民族運動(MNLA)が正式に結成され、マリの北部半分の支配権を掌握してトゥアレグ族の独立国家を樹立するという目標が宣言された。次いで2012年1月に軍事行動が開始され、その3ヵ月後にこの目標は達成された。

マリの国軍はトゥアレグ族の猛攻にあって崩壊した。米国が数年にわたって装備と訓練を提供してきたが、マリ国軍にはその両方が不足していた。実際のところは、アマドゥ・トゥマニ・トゥーレ大統領政府がマリ軍に必要な財政支出をしなかったため、2012年3月に下級将校が政府に対してクーデターを起こした。隣接する西アフリカ諸国経済共同体(ECOWAS)の制裁

と、国連安全保障理事会(UNSC)での激しい非難に直面して、反政府勢力は譲歩し、暫定政府を承認した。ただし、その裏で反政府勢力は、暫定政府の政策に不満を抱けばいつでも、マリ政治の表舞台に雪崩れ込むことができるだけの力を温存している。

一方でECOWASには、UNSCによってマリ北部を奪回するという任務が課せられ、総勢約3,000人(アフリカ連合の支援により現在は7,000人に拡大)の兵力を集結させた。ただし、アフリカ連合の指導者達は、この兵力は再訓練が必要なので、2013年9月までは配備することができないと警告した。このようにマリ北部奪還への動きは悠長であったが、トゥアレグ族の反乱に乗じて北部イスラム武装勢力が突然南下したことで、状況は一変し混乱が生じた。これは2013年1月半ばまで首都バマコへの脅威となっていた。

フランスの原子力発電所にウランを供給するニジェール・アールットの鉱山の既得権益を守りたいフランスは、兵士2,000人を進攻させてマリ軍の反撃を支援し、チャドから戦闘機を送り込んで反乱軍の拠点を爆撃した。

イスラム・マグレブ諸国のアルカイダ(AQIM)

しかし、このころになると2つ目の紛争が、1つ目の紛争と絡み合って現在の状況を生み出していた。この紛争のルーツは、1990年代のアルジェリア内戦と、当時アルジェリア政府に立ち向かった過激派グループ、その中でも最も過激な武装イスラム集団(GIA)にまで遡る。

GIAは、一般市民の虐殺への関与とGIAの評価を落とすことを狙ってアルジェリア治安部隊が潜入したという疑惑で知られている。またこの2つの問題が見えない形で結びついているという根強い疑惑もあった。結局は1997年に新しい過激派集団「説教と戦闘のためのサラフィー主義者集団(GSPC)」が出現した。カビリアを

本拠地とし、ハサン・ハッターブが率いるこの過激派集団は、一般市民に対する攻撃は放棄したが、代わりにアルジェリア国家とその施設を攻撃対象とした。

この10年間で軍事的圧力が高まり、他の地域では暴力が次第に下火になったが、この武装集団はカビリアの要塞に執拗に踏み止まり、地元の農民からの税の取りたて、誘拐の身代金、地元郵便局の襲撃などによって資金を調達していた。2003年に突然南方へ移動し、名うての南方ジハード戦士モフタール・ベルモフタールの下で新しい分派組織を立ち上げた。モフタール・ベルモフタールは、サハラ砂漠全域にわたる大規模な密輸組織の一員でもあり、1980年代にはアフガニスタンで活動していた。この密輸組織は伝統的にタバコと武器を扱ってきたが、薬物と人間にも手を広げ始めたところであった。これは周辺諸国が密輸組織の撲滅に有効な手を打とうとしなかったこともあって、組織に大きな利益をもたらした。

この新しい武装集団は、南部アルジェリアで33人のヨーロッパ人旅行者を誘拐したことで一躍その名が知れ渡った。また表向きこの集団は、北部アルジェリアの混乱から逃れてきた難民で当初アルジェリア軍パラシュート部隊の将校であったLamari Saïfi（“Abderrazak le Para”として知られる）が率いていた。Lamari Saïfiについても、アルジェリア治安部隊と関係があるという噂が後を絶たなかったが、それが証明されたことはなかった。2004年に彼がチャドの反政府組織に捕らえられた後、アルジェリアに引き渡されたときには、組織の主導権はモフタール・ベルモフタールに移っていた。ただしLamari Saïfiは、捕らえられて失踪する前に、500万ユーロとも言われる身代金を目的としたヨーロッパ人の誘拐を主導することができた。一方でGSPCの新しい分派組織は、マリ北部の遠隔地タウデニにある古代の岩塩坑に引きこもって

いた。この地域では地元名士との有力なコネによって身の安全が確保されていた。

次の10年間では大きな変化はほとんど見られなかったが、アルジェリアの平和は徐々に回復し、カビリアのGSPCは孤立を深めた。ハサン・ハッターブが追放されて、GSPCの主導権はアブデルマレク・ドゥルークデルに移り、最終的にはアルジェリア当局と折り合いをつけるまでになった。ドゥルークデルはグローバル・ジハード・ネットワークに参加したいという野望を抱いていた。2006年、GSPCはこれ以降はイスラム・マグレブ諸国のアルカイダ（AQIM）と名乗ると美辞麗句を並べて宣言した。これによって、アフガニスタンやパキスタンの山寨にいたアイマン・ザワヒリがAQIMの存在を知ることになった。組織の名前が変わっても、カビリアやサヘルにおけるこの組織の活動が変わることはなかった。マリ、ニジェール、モーリタニアなどのサヘル諸国に在住もしくは旅行する欧米人を誘拐し身代金を奪取（あるいは身代金受取に失敗すれば処刑）するような犯罪行為とイデオロギーの純粋さが混在していた。

アラブの春に直面した AQIM

サヘルのAQIM内部と、サヘルとカビリアの2つの分派の間の両方に緊張が現れ始めた。1つ目の問題は極めて広く分散した2つのグループの活動とイデオロギーとの調整の困難さを反映したものであり、2つ目の問題は指導部に対する反発であった。特に南部では、AQIMの構成員は、基本的にアルジェリア人であることという規範前提にもかかわらず、兵員を補充した地域を反映してますます多民族化していたため、指導部への反発は特に激しかった。2つ目の問題は、2010年に「友好的な分離」を受け入れることで解決した。この分離によって、モーリタニア人が大勢を占める新しい組織「西アフリカ統一聖戦運動（Mujao）」が出現した。

1つ目の問題は、2011年初頭にアブデルマレク・ドゥルークデルがAQIM 指導部からモフタール・ベルモフタールを追放し、指導者が存在しない組織を支配下に置くことを、Kabyliが再び主張したときに、更に緊張が高まった。情報伝達が極めて困難なために、この企ては部分的にしか成功しなかった。例えばアルジェリア当局は、昨年7月に諮問評議会の議長を含む数人の密使を逮捕した。Kabyliが支配権を再び主張しようとして、アラブの春による激動の結果としてリビアやその他の場所に出現したサラフィ・ジハーディ運動との連携を実際に模索していたが、これは失敗に終わった。指導部の交代は変わらず、モフタール・ベルモフタールは孤立した。

モフタール・ベルモフタールは孤立していたにもかかわらず、マリ北部のガオに留まっていたようである。彼はこの時期までには婚姻を通じて周辺部族の社会に溶け込んでいたが、明らかに自分の活動、すなわち犯罪もイデオロギーも放棄するつもりはなかった。その結果として、モフタール・ベルモフタールは覆面旅団(al-Moulathamoun、元々はAQIM内のベルモフタール部隊の名称)もしくは血盟団として知られる新しい組織を結成し、昨年12月にその存在を正式に表明した。明確でないのは、彼がAQIM指導部の同意を得て新しい組織を結成したのか、もしくはこれは彼の反抗であったのかということである。

このころになると、AQIM内部の込み入った緊張関係よりもその地域での出来事のほうの問題になった。2011年のリビア危機がもたらしたものは、1年後にマリでトゥアレグ族が新たに起こした反乱だけではなかった。サハラ砂漠を越えて密輸された武器が雪崩れ込む機会ともなった。AQIMは明らかにリビアの武器備蓄の大量流出による恩恵を受けていた。そのためアルジェリア当局は2011年から2012年にリビアから

サヘルへと西に移動する武器輸送車列に対する警戒と取り締まりの頻度を増すことによって、武器の流入を阻止した。加えて、AQIMは長年にわたりトゥアレグの領土に所在していたので、トゥアレグ族の中にも急進派を生み出した。すなわち、2011年に新しいイスラム武装組織アンサール・アッ＝ディーンが出現したのである。

この新組織が新兵の獲得に成功したのは、イヤド・アグ・ガリーが指導者であり革新者であるという事実に負うところが大きい。イヤド・アグ・ガリーはトゥアレグ族の貴族出身で、1990年のトゥアレグ族の反乱の指導者であり、AQIMとの繋がりもある。彼はサウジアラビアでマリ総領事として任務に就いていた10年間で急進的になったようだ。理由は何であれ、彼の新組織は新兵の獲得と、トゥアレグ族とアラブが支配するAQIMとの間の民族的ギャップを埋めることに成功した。AQIM指導部は、MNLAが主導したトゥアレグ族の反乱をAQIMの影響力を拡大する理想的な機会と捉えていたので、この連携は彼らの計画に不可欠であった。結果として、トゥアレグ族がマリ北部の支配権を獲得したので、3つのイスラム主義運動(Mujao, AQIM, アンサール・アッ＝ディーン)は、マリ北部の主要都市の支配権をMNLAから奪い取ることによって、イスラム教カリフの構築を始めることができた。

イナメナス襲撃

イナメナス近郊にあるBP社、スタトイル社、ソナトラック社が共同運営するガス施設への攻撃は、超国家ジハード・グローバリズム(欧米に対する実存的脅威)の新しい波の到来を告げるものであると、欧米では広く信じられている。ただし、実際に起きたことを慎重に分析すれば、そのような主張が支持されることはないであろう。

ガス施設への攻撃は覆面旅団のメンバーが実

行したものである。襲撃犯の数は最大で40人、その大部分がリビア出身であった。作戦はリビアで計画され、指導者だけがマリから移動したものと見られている。この事件はイスラム主義の影響がマリ南部に拡大すると同時に発生したが、時期を意図的に合わせたという証拠はない。事件に関与した者が言葉で要求を伝えたとはいえ、この事件の本当の目的がアルジェリア、ヨーロッパ、米国に拘束されているイスラム主義者の囚人100人の解放であるという証拠もない。

それどころか、近隣の空港に移動する外国人を乗せたバスへの最初の攻撃で実際に取った行動パターンは、真の目的が身代金のための人質確保であったことを示唆している。これは典型的なAQIMの行動パターンであり、2003年にヨーロッパ人旅行者を人質にした時にAQIMが取った行動の再現であった。襲撃犯は、2003年の事件のように、アルジェリア軍には欧米人の人質を解放する義務があるものと思っていたようだ。そのため、最初の攻撃が失敗したとき、襲撃犯はガス・プラントと居住区に退却し、その後5回にわたって人質をつれてアルジェリア軍の非常線を突破しようと試みたが、成功することはなかった。興味深いのは、襲撃犯はアルジェリア人の人質に対して、彼らと事を構えるつもりはないと明言し、後に数百人が逃走してもほとんど阻止することはなかった。目的は外国人であった。襲撃犯が逃走も交渉もできないと分かったとき、アルジェリア軍が虐殺を阻止できるまで、犠牲になったのは外国人であった。

今にして思えば、いかなる代償を払っても事件を迅速に終結させるというアルジェリア軍の決断を、人質犯が極めて過小評価していたことは明らかである。

作戦指揮官Bachir Tartag 将軍は、このような事件に対しては厳しい姿勢をとることで知られている。また彼はアルジェリアの国内治安部隊も率いている。彼は、アルジェリアの治安部

隊全体の長官モハメド・メディネ将軍（アルジェリアにおける真の権力を掌握しているが退官を切望している）の後継者と見られている。明らかに、Tartag将軍は犯人グループが素直に投降しないことが明確になったときには、人質がどうなろうと、この襲撃事件を終結させて犯人グループを壊滅させようと決意していた。このような状況から、イナメナス事件の指揮を取っていたのは軍隊であり、アルジェリア政府は情報の公開や国際世論の沈静化といったむなししい試みを続けるしかなかったことは明らかである。例えば、軍司令部や治安部隊と親しくないブーテフリカ大統領は、治療のためと称してジュネーブへ逃れ、アブデルマレク・セラル首相に激怒する諸外国の対応に当たらせた。

同時に、重大な手違いが生じていたことも明らかになった。イナメナスとイリジ間のアルジェリア・リビア国境は厳重に監視されることになっており、殊に襲撃犯は、常に取り締まりの対象となっている2つの舗装路のうちのいずれかに沿って移動するので、ガス施設に到着するかなり前に発見されるはずであった。地元の警官隊（50人が現場に派遣されていた）は、襲撃犯がバスを攻撃したときに彼らを無力化させるべきであったが、そうはできなかった。一方で、迅速に敷かれた軍隊の非常線は、極めて少ない兵力で脱出を阻止できたと見られ、その結果、恐らくは流血の最終決戦を遅らせることができ、人質数人の命を救った。またガス施設内の企業警備員が武装していれば、襲撃犯が実際にガス・プラントや居住区に侵入したとき、欧米人を保護し襲撃犯を撃退することができたかもしれない。アルジェリアのサハラ砂漠地域で操業している石油・ガス施設は、過去数十年間にわたり暴力やテロとは無縁であったために、治安部隊に油断が生じてその隙を突かれたという結論になるのは致し方ないであろう。この状況は間違いなく変わるだろう。

事件の発生理由

イナメナスへの攻撃は、新しい対テロ戦争における最初の一撃からはほど遠く、イギリス首相が私たちに信じ込ませようとしているとおり、追放されたテロリスト指導者の恨みとアルジェリアに対する長年の敵意の産物であったように思われる。AQIMの指導者がこの襲撃を容認しているか、もしくは何も知らなかったかを知る由はないが、タイミングだけを考えれば、マリにおけるAQIMの幅広い目的や国を乗っ取るというプロジェクトとの調整が欠如している。皮肉なことには、アルジェリアは南部国境線の状況については懸念しているが、国連・アフリカ連合アジェンダが承認されないことを切望している。これは長年の顧客であるトゥアレグ族と交渉して、MNLAとアンサール・アッ＝ディーンが、AQIMとその分派Mujaoに敵対するように仕向けようとしているからである。自国をサハラ及びサヘル地域の主導国と見ているアルジェリアは、通常国境を越えて自国軍を派兵することはなく、また自国の活動領域と見なす場所にヨーロッパが干渉することを非常に嫌っている。アルジェリアは、国境の安全保障確保には、影響力や約束が伴う間接的アプローチを好む。たとえそのようなアプローチに軍事的圧力による裏づけがあったとしてもである。

アンサール・アッ＝ディーンが民族的同胞よりもイデオロギー的同胞を選んだときには、突然予想もしないときに交渉が中断された。これによって、イスラム武装勢力がマリの首都バマコを目指して突如南下したようにも見える。ただし、計画がいかに高度であったとしても、これではイナメナス攻撃とマリにおける南下とを調整できるだけの時間的余裕はなかったであろう。また、アルジェリアが自国の領土における

テロ攻撃よりも、マリの武装集団に対して激しい敵意を持つ可能性の高い事件を想像するのは難しい。

要するにモフタール・ベルモフタールは、主導力を回復しようとして単独で行動したように思われる。この主導力は2003年には彼の役に立ったが、今日の変動の激しい状況で、(皮肉にもAQIMと同様に)和解し難くかつ避けられない敵と見なしている国家に対抗するには、極めて不適當であった。

それでは将来はどうなるのだろうか。アルジェリアが不安に陥れられ、恥をかいたのは事実である。サハラ砂漠の石油・ガス企業は、「そこにある危険」について有益な警告を受け取った。フランスはマリへの軍事介入を断行して、イスラム武装集団をマリ北部の奥地へと追い込み、あとは(少なくとも理論上は)、ECOWASとアフリカ連合が時間をかけて撲滅するだけとなった。アルジェリアがフランスに対して領空通過権を介入の一部として認めなければならないと感じているとしても、アルジェリア政府は交渉を継続している。

イナメナスの襲撃が失敗に終わった数日後、新グループ「アザワド・イスラム運動」が離脱する形で、アンサール・アッ＝ディーンが分割されることが報じられた。アザワド・イスラム運動は、MNLAが求める「マリ国内の自治国家」を支持して、カリフ構想を捨てた。モフタール・ベルモフタールが今回の襲撃に失敗したためにガオから逃れたことは間違いない。彼はアルジェリア国家を傷付けることはできても、本当の意味で脅かすことなどできない危険でしつこいアブのような存在のままであり、広い世界とは全く無関係に生きている。